

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

資料 8 - 1

① 多様な人・価値観の共存

○鴨川で日焼けしてる人

- ・ 隣の人は何しているかを微笑ましく見る状況が成立している。人を気にしていないということではなく、景色の中にいる自分が心地よいという場が結構ある。いろんな人たちが動きながら気にしていないわけではないが、景色をつくっている状態が京都っぽい

○紹介文化

- ・ 人と人のつながりもそうだが、お店の人もつながることが京都らしさ

○それぞれの軸を大事／リスペクトしている

- ・ 長く住んでいる人、京都が好きな人、いろんな価値観を大事にしている

○圧倒的な自意識

- ・ 「らしさ」をすごく意識することが京都らしさ。京都の人は誇りを持っている。文化、歴史、日本における都市の立ち位置にも自意識を持っている

○奇人が溶け込むまち

- ・ 不思議なことをしている人たちが妙に際立って変なことをやっている、ということにならないのは京都っぽいところ
- ・ 灰汁が強い人が京都は多い。灰汁が強い人が要所要所にいないと

○モノ・コトを介してまとまっている

- ・ 東京は人との関係で成立していて、京都は人を媒介にしたモノやコトの関係で成立している

○場を「見つけられる、共存できる」

- ・ いくらでもいられるところを見つけれられる、どんな人でも居場所を見つけれられるのが京都の土壌

○のびのび人の目を“気にしない奇人”

- ・ 東京の奇人は人の目を気にした奇人。京都は、他人ののびのびを許すということは、自分ものびのび、奇人になって良いということ

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

② 自立性が高く個性が際立つ

- ひとりひとりにポリシーがある
 - ・ 京都の人は灰汁が強い。昔ながらの人は特にコントロールできないくらいだが、人情味がある。周りに配慮もするし、ほどよい衝突もある
- 灰汁がたまっている、たまっていく
 - ・ 灰汁の濃いところがないと薄まるだけなので、現状に応じるだけでなく、灰汁を溜める、守っていくことが重要
- 個人がイキイキとしている
 - ・ 個人個人の小さなビジネスが生き生きとそれぞれのリズムで経営できる。ワークライフバランスも担保されてるのが京都らしさで、京都らしさを生み出している
- ニッチでおもしろい個人
 - ・ おもしろい個人がたくさんいたら、大衆化したものも分散化していくはず。個人、ニッチさを取り戻すこと。分散化するし、楽しそうだと思う。自分なりの美学が生まれ、それが共存するとい
- 自営業・個人事業主・個人商店の多さ
 - ・ 小さな規模のビジネスが生き延びられる環境
- 小商い
 - ・ まちの中におもしろいお店、勝手なこと、好きなことをしている人がたくさんいる。商いに関わらず好きなことをやっている人が多い

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

③ 市民が醸す強い信頼関係と責任感

○信頼と監視

- ・ 信頼が社会を作っている。信頼以外を一番大事なものにしてしまうと、社会のバランスが崩れてしまう

○人目と責任

- ・ あそこが続けているから自分もやめられないというような人との関係、良くも悪くも人目があって、そこに責任が生じる。

○責任、規律

- ・ 歴史の中でバトンタッチされてきたものを守る、攻めるときに、過去の価値も踏まえて、引き継いでいく。現行基本構想も主語は「市民」。ものごとをWeで考えるのが京都。だからこそ、責任や規律が生まれる

○みんなで守るという意識

- ・ このまちをみんなで守るという信頼があるから守り続けられるのであって、守るのが自分だけと感じてしまうと、大事なものではなくなり、優先順位が変わってしまう

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

④ 人と歴史が紡いできた多層的な文化

- 新しいカルチャーが生み出せる
 - ・ 学生が多く、芸術系の専門学校が多いので、新しいカルチャーがどんどん出てくる場所。東京に対してカウンターカルチャーが出やすいのが面白い
 - ・ カウンターカルチャーは京都らしさを形作る一つのポイント
- インスタントではない文化がある
 - ・ インスタントでないことこそが京都のまち
- 洗練されたてづくり感
 - ・ 職人が多いので手作り感があるまち。その中でもただただハンドメイドということではなく、洗練された技術が積み上がってきている手作り感
- 懐の深さ
 - ・ 不思議な、際立った活動をしていても京都のまちに馴染むことが懐が深くて良い
 - ・ どこにいても平気なのがまちの懐の深さだと感じる。どんな人が来るのか想像できないお店でも成立している
- オープンと閉鎖のバランスが良い
 - ・ 守ってきたものがあるから閉鎖的。一見さんお断りも、信頼をもとに守ってきたところがある。必ずしも開きすぎることが良いことではない。時代に応じてどうチューニングするかのバランスを京都は取り続けてきたから、老舗や長寿の企業が営み続けられてきた
- 雑談カルチャー
 - ・ 東京の人から雑談しやすいと言われる。雑談してから話が始まるが、東京はそこに至れない。雑談の重要度が雑談が頻繁におこるまちは良いまち

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

⑤ 伝統や歴史を身近に感じられる

- 宗教施設や歴史的建造物と暮らしの距離
 - ・ 神社仏閣の歴史的建物が観光的な資源というよりはくらしに近いものとして身近にあることが素晴らしい価値。例えば、昼休憩や帰りに寄ったり、疲れて佇みたいときに行ける距離感
- 歴史的なものと日常が同居している
 - ・ 早朝、清水寺に散歩しに行くのが日課だという区民の方がいる。そういうところが京都らしさ。得した感じ
- 伝統的な暮らしを体験できる／日本家屋に暮らす若者の多さ
 - ・ 町家を自分で改修して住んでいる人の話はよく聞く。伝統的なくらしや建築を日常的に体験している若者が多いのは京都らしさ

⑥ ゆったりとした時間軸

- ゆったりとした時間が流れていること
 - ・ 東京は目的に向かって一直線な感じがするが、京都は逆にまち全体、人の時間の流れがゆったりしている
- 余白や季節の変化
 - ・ 人が豊かに暮らすためには、ルーティーン、余白を大切にされていて、季節の変化を緩やかに楽しむようなところがある

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

⑦ 価値が生まれる風土

○見立て

- ・ 京都にあるものを見て、有意義に使いそうだと思うことを馴染ませていく

○自分なりの美学

- ・ 知り合いが、鴨川の河川敷のベンチに茶室を立てて、茶を立てていた。彼にとっては、そこが茶室に見えたそうで、彼なりの美学

○価値の再発見、再規定

- ・ 過去から引き継いできたものを再文脈化している、大事なことを自分たちなりに再解釈して、今の時代にフィットさせている人が多いと感じる

○創作と思索の都市

- ・ 京都をモチーフに物語が生まれやすい。哲学の道や京都学派といった系譜もある。深い思想に没頭できるのが京都

○伝統もかつてはスタートアップ

- ・ 今は伝統産業と言われているものも、当時は最先端の技術であったはずだし、アントレプレナーが生まれるということも脈々と受け継がれている

○スタートアップマインド

- ・ 最新技術を使って事業を生み出すということが昔から続いてきた。最近では、はてな、任天堂、オムロンなど、グローバルに挑戦する企業が継続して生まれている

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

⑧ 不易流行

- 普遍を受け入れる
 - ・ 京都は他のまちよりも普遍を受け入れて、扱ってきたという歴史がある
- 変わらないために変わってきた
 - ・ 時代に応じることを自然にやってきた老舗企業や長寿企業の考え方。変えること、変えないことの両方を大事にしている
- 長期間の蓄積
 - ・ 京都は歴史が長い。価値のあるものが蓄積して、時代を超えていく。誰かが引き継いでいくので、人が媒介していく。時代を超えて価値が受け入れられて、いま目の前にある
- 伝統と技術のバランス感
 - ・ 京都は伝統だけでなく、最新技術に対しても投資していく、両方のバランス感がある

⑨ 本物を見極める力

- 本物が本物として存在できる
 - ・ 昔から良いものが集まった歴史があるから、京都にある本物が本物だという認識がされている
- 本物に触れられるまち（目が肥える）
 - ・ 得意技としての「めきき」は本物に触れているから出来上がるもので、環境がつくるものでしかない。近くに本物の手わざがある。それがまちなかにある状況で生活していると、自然に目が肥える
- 目に見えない価値を価値と捉え評価する
 - ・ ビジネスの中で、見えないものを信じるということが根付いている。1200年の歴史の積み重ねが、見えないものを価値として捉え、敬意を払っている
- 計画的ではなく「想い」をベースにつくられるまち
 - ・ 一人一人の感性や価値観を出して、それを面白がれるところに、京都は本物だというお墨付きをつけてきた

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

⑩ つながる場が多様にある

- 集える場所がたくさんある
 - ・ 川や広場、喫茶店、バーが公共ではないが集える場所になっている。何かがコミュニティの場として機能しているのが「らしさ」
- 目的なしで居られる
 - ・ 京都は目的なしでいられる場所がすごく多い。ふらっと鴨川に行き、何もせずに過ごしていると周りが面白いことをしていて、そこに自然に介入することが起きるのは面白い
- 空間が人をつくっている
 - ・ 空間があって、そこに行くことで何かが起こるのが面白い。「文化の厚み」も厚みのある文化の空間に行くから、そこに何もいない人が行っても、その場で自分がどう楽しもうか、という考えになる。人が空間によって刺激される場所が多い
- 鴨川を起点とした自然の近さ
 - ・ 鴨川は世界的に見ても素晴らしいパブリックスペースで、あそこまでの距離、広さで自由度のある、いわゆる自然公園は価値として残すべき京都らしさ。盆地なので山が近く、自然の近さも大きな価値
- 静寂
 - ・ 京都は観光客が多く、街中はざわついているが、ひとつ道を入ると静寂が感じられる。その差がおもしろい。動と静があるからこそ、街並み、文化が成り立っている
- 京都に飛び込んで京都の一部になる
 - ・ すでにまちの中にあるものを活用して、自分がそこに飛び込んで風景の一部になること

Q 1 他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とは？ = 京都独自の価値観・強みとは何か？

⑪ コミュニティの有機的な連動

- 番組・学区等の自治意識
 - ・ 番組、学区、もともとの小学校を起点としたコミュニティの自治意識。そこに学生や新しい人たちが乗り切れていないのは課題だが、長く住む人はグループ意識がある
- 熱狂的なファンがいるまち
 - ・ ひいきの店があるカルチャー、閉鎖的なコミュニティは、一部熱狂的なファンがいるということ
- 閉鎖的なコミュニティ
 - ・ 閉鎖的なコミュニティも、ある種ポジティブに捉えることもできる。そこで特殊なものが育まれている側面もある
- 小さなコミュニティの有機的な連動
 - ・ 閉鎖的なコミュニティがあることはネガティブと思っていない。小さいコミュニティがたくさんあり有機的に連動していることは面白い
- ちょうど良い距離感
 - ・ 京都は深入りしすぎず、でも存在は知っているし、挨拶もする、という認識が防災でもある
- 「信頼」をもとに積み重ねたコミュニティ
 - ・ 閉じているから入っていける、完全に入り込む余地のない閉鎖的な空間はそんなにはないのではないか